

霊操 第20回 イエスの幼年時代：柴田潔 神父 2021年10月29日

はじめの祈り ロザリオ 喜び 第4の奥義

霊操 第2週

イエス・キリストは自分にとってどのような方か？ イエスの幼年時代の背景を知る。養成されるマリア様について知る。

導入 「ナザレにおける蓄積」『イエス・キリストの履歴』岩島忠彦著 オリエンス宗教研究所 2011年
(一部表現を変えています)

ルカ福音書は「イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人から愛された」(2:52)で幼年物語を結んでいる。福音書に見るイエスの後の行動からすると、彼が自然に対しても人間に対しても社会組織に対しても鋭敏な観察眼を持ち、浮つくことのない現実感覚を保っていたことが想像される。率直、誠実、真摯、正直・・・こういった「性格」もまた生来のものであっただろう。

人の性格はそう変わるものではない。こうしたイエスの関心はどこに向かっていたのだろうか。間違いなく「人間」である。

私(岩島神父さん)の子供のころ、家の近くに垢まみれてゴミ箱をあさる松葉杖の男がいた。私(岩島神父さん)にとって最も強く記憶に残っている人物である。

イエスの周辺にはこの類の人間がもっともっといただろう。難病で放り出され、人間扱いされない人。土地を奪われ、農奴となった人。借金のかたに妻や娘まで売り飛ばされた人。失業し、追われ、蒸発する人。他方、商売人はあくどいやり方で金儲けをする。支配者や金持ちは自分の資産を増やし、持って数知れない群衆を無産階級へと陥れる。宗教家はこうした人々を「罪人」と呼び、差別

を増幅した。イエスは子供のころ以来、このような人間の悲惨と不正を心に焼き付けていたに違いない。

もう1つのことがある。イエスの神との関わりである。この点に関しては私たちは何も知らない。ただ彼は後に神の福音のために命をかけた。それならば、彼が以前から神のまじり毛のないいつくしみと命の交わりを何らかの形で強力に経験していたと考えるべきであろう。それはある種の「呼びかけ」あるいは「召し出し」といった色合いを持っていたのであろう。

イエスは30歳になるまで、“ふつう”に生活していた。しかし一方で人の世の非情さ、他方で神の豊かさという対照的な経験を抱え込んでいた。私(岩島神父さん)はこれを「ナザレにおける蓄積」と呼んでいる。イエスはまだ行動しなかった。(神殿での失踪事件の後もナザレに戻り両親と暮らした)

ただ「これらの事をことごとく心に留めて、思いめぐらしていた」だけである。しかしこの「蓄積」が質的転換をする時が来るのである。(イエス様の公生活はルカでは洗礼の場面で始まる3:21～)

『**キリスト教とは何か**』からペトロ・ネメシエギ著 女子パウロ会 1977年(一部表現を変えています)
どんな社会でも見られるように、当時のイスラエルの社会でも、金もうけだけに気を配っている富者たちがいました。彼らは自分の富が提供してくれる快樂におぼれ、富のもたらす安心感を味わい、貧しい人々の困苦を気にもかけないばかりか、彼らのうちには、ローマから税金を集める権利を委

託してもらって、決まった税よりも多額に取り立てる徴税人のように、貧しい人々を搾取し圧迫する者もいました。

富者のほかに、もちろん、イスラエルの社会の圧倒的部分は貧しい大衆でした。農民、漁民、職人などがそれです。彼らは、日々の糧を手に入れるのが精一杯で、貧しい日々の生活を耐え忍びながら、すべての願いを満たす理想郷が現れるのを夢見ていました。

さらにまた、社会の底辺には、もっと悲惨な人々がいたのです。やもめ、孤児、娼婦、盲人、歩けない者、重い皮膚病をはじめさまざまな病気に悩まされている人々、彼らの生活は実にさんさんたるもので、悲哀に満ちた毎日を送っていました。

子どもは“死”をいつ理解するのか

『悲しんでいい 大災害とグリーフケア』（一部表現を変えています）高木慶子著 NHK 出版新書 2011 年 7 月 10 日

「人は死ぬ」ということを、子どもは何歳になればわかるのでしょうか？ 1948 年にハンガリーにマリア・ナギーという心理学者が、3～10 歳までの子どもを対象に調べています。その結果「子どもは 9 歳で人間の死を理解できる」というのが、世界的な共通認識になっていました。

しかし、「兵庫・生と死を考える会」（「生と死の教育」研究会）が 2003 年に行った「幼児・児童の死生観についての発達段階に関する意識調査」では、日本の子どもたちは 6 歳になると約 80%は「人の死」というものがわかるという結果が出ているのです。

どこでわかるかといえば「自分」と「お母さん」の存在です。3 歳児くらいでは、「自動車は動

くから生きてる」と答える子どももいますが、4歳、5歳になると、「生きるもの」は何かがわかってきます。そして、ペットや花は生きてるけれど、機械や道具は生きてないことが理解できるようになります。そして、生き物が死ぬこともわかりはじめ、5歳児の70%くらいは「ペットは死ぬ」「お父さんも死ぬ」と答えます。でも、自分とお母さんは「死なない」のです。この段階では、子どもにとっての“死”は「なくなってもいいもの」と同じような意味なのですね。

これが6歳になると、「ペットも死ぬ」「お父さんも死ぬ」「お母さんも死ぬ」「わたし（ぼく）も死ぬ」と答えるようになります。“人の死”が理解できるようになります。

イエス様の周りには、争いごとで殺される人、搾取されて虫けらのように亡くなる人、病気になっても手当てされずに死ぬ人たちが大勢いました。また、強い者が弱い者を虐げる世界でした。神の救いから外され。とみなされ人たちは差別されていました。今の世界でも、イエス様の時代のように、虐げられて人権が認められない国、大きな国に搾取される国があります。

日本には義務教育、医療保険制度、社会保障があります。イエス様の幼年時代を黙想する時に環境の違いを頭に入れましょう。

＜養成されるマリア様＞ 神様の救いの担い手になるために、神様はマリア様を段階を踏んで養成された

参考文献『宣教者を育てるイエス』（一部表現を変えています）カルロ・マリア・マルティーニ著 今道瑤子訳 1988年 女子パウロ会

養成の出来事① お告げ ルカ 1：29 **：最初の強い衝撃**

ルカ 1：29 「マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ（胸騒ぎ）

がした)」

- ・神様の新しい世界に接してマリア様が受けた最初の衝撃
- ・「胸騒ぎ」（ディエタラクテエ）は非常に強い言葉で、お告げの場面で使ったのは驚くべきこと。

新約では、マタイ 2：3「ヘロデのろうばい」 マタイ 14：26「水上を歩くイエスを見て弟子」

ルカ 1：12「ザカリアが天使の出現を前にした」場面で使われている。

- ・マリア様は、まじめなお祈りの生活、聖書を読む習慣を身につけていました。けれどもお告げを
受けて、神様が別の次元に連れて行こうとしているのを感じました。確実さを手放して、神様の新
しい働きに自分を任せる必要を感じました。

***お告げの時から神様の次元に備えてのマリア様への養成が始まります。**

神様の次元と人間の次元

マリア様の態度には裏腹の部分があります。

「わたしは主のはしため、お言葉どおりになりますように」 1：38b

「わたしの魂は主をあがめ・・・」 エリザベト訪問（1：47～）

マリア様は神様の計画に自分を合わせ、喜んで身を捧げる見本を示してくれました。しかし、誕生
したばかりのイエス様の命が狙われます（マタイ 2：13～23）

***マリア様にとって「暗夜」が深まります。**

養成の出来事② 神殿奉献 ルカ 2：25～35 「あなた自身も槍で心を刺し貫かれる」予告

『あなたがたは 祈るとき』カルロ・マリア・マルティニー著 吉向キエ・池田敏雄 共訳 中央出版 1983 年
(一部表現を変えています)

シメオンは幼な子を腕に抱き、神をたたえて言った。
「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり この僕を安らかに去らせてくださいます。
わたしはこの目であなたの救いを見たからです。これは万民のために整えてくださった救いで、
異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです。」
父と母は、幼な子についてこのように言われたことに驚いていた。
シメオンは彼らを祝福し、母親のマリアに言った。「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの
人を倒したり立ち上がらせたりするためにと定められ、また、反対を受けるしるしとして定められ
ています。——あなた自身も剣で心を刺し貫かれます——多くの人の心にある思いがあらわにさ
れるためです。」

一人の幼な子を抱く一人の老人

シメオンは自分の生命を引き継いで下さる幼な子を両腕に抱いて満足します。シメオンはお告げを
希望しながら待ちました。その希望は、幼な子の生命力と未来にあふれた姿で表れました。シメオ
ンが幼な子を抱いたことは、私たちが、神の新しさと対面することを象徴しています。神の新しさ
は、一人の幼な子のような姿で現れます。

希望を読み取れる目

シメオンは、信仰の人で“希望となる方”を諦めずに、忍耐強く待ちました。彼は、イスラエルの
民が蔑まれ、圧迫され、苦しんでいるのを見ながら希望しました。シメオンは、救い主を自分の目
で見て賛歌を唱えます。

シメオンが神の新しさに出会い賛美したのに対して、イエスの両親はシメオンの言葉に驚き、不吉
さを感じます。神の救いには、喜ばしい面と、御免被りたい、両面があります。

入会前の母の言葉

「子供が3人いたら、一人くらいどうなってもいいというわけではないのよ。一人一人が完結して
いるのよ。戦争のない時代で良かった、と思っていたのにこんなこと（息子が修道会に取られる感
覚）になって・・・」

・母の思いと父なる神様の思いの違い

養成の出来事③ 失踪事件 ルカ 2：41～50 ナザレの蓄積の大きな出来事

幼年期に起きた神殿でのイエスの失踪事件は、生涯にとっても重要な意味があります。

私は御父と共にいる、私は御父のうちにいる、私は御父の家になければならない、と気づいたことは幼年時代のイエスにとっても大きな出来事でした。

ルカ福音書ではここで初めて過越し祭に触れています。失踪事件はイエスさまの最後の過越し祭を予告します。イエスの生涯は、幼年時代のこの過越し祭と、最後の過越し祭との間に繰り広げられたことになります。イエスは失踪事件を、御父への移行の前ぶれであることを知っていた、と考えられます。

「残る」の意味

「祭りの期間が終わって・・・少年イエスはエルサレムに残っておられたが、両親はそれに気付かなかった。」 「残る」の語源は「住む」「留まる」。ヨハネ福音書では「住む」は象徴的な動詞です。御父の住まいに「留まる」、御子のうちに人の住まい、みことばのうちに人の住まいを表現する。

イエスが神殿に「残る」ということは、神殿に「住む」ということです。イエス様の居場所ということです。神殿には、居場所という親近感と、定住（最期の間）という神秘的関わりがもうこの時点でほのめかされています。

両親の無理解

イエスさまの神殿への親近感と、両親の無理解は対象的です。

マリアの戸惑いは、小さなことではありません。普通、母親は子どもが何に興味を示すか感づいて
います。親の目を逃れて行こうとする場所さえ熟知しているものです。しかし、その場でマリアは
イエスの行動を予測できませんでした。

マリアとヨセフは、「イエスが・・・いるものと思い」と、イエス神殿に居残ったかもしれないこ
とに全く考えが及んでいません。「それから・・・探し回った」という言葉から、二人がイエスの
ことを心配もせず、1日のんびり過ごしていたことをうかがわせます。神の子イエスへの無理解を
暗示しています。

探し回った両親に、イエスは「どうして私を探したのですか。私が自分の父の家にいるのは当たり
前だと言うことを知らなかったのですか。」と言います。

「しかし、両親には、イエスのことばの意味が分からなかった」

イエスの神秘の啓示を、マリアとヨセフは何のことかさっぱり分からなかった。

マリアとヨセフの不理解（9：45）は、弟子たちの受難予告への不理解（彼らにはこの言葉の意味
が隠されていて、イエスの言われたことが理解できなかった。18：34 他）の先駆け。

マリアの動揺を示す厳しい言葉

「両親はイエスを見て驚き、母が言った。『なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんも私も心配して探していたのです』」。あなたに母親の気持ちは分かるまい、とでも言わんばかり。

動揺した母親にイエスは答えていません。

マリアにもこのような無理解が起きました。マリア様もいつも息子イエスを理解できたわけでは
ありません。

マリアは、「わたしの子育ては何だったのか？ 失敗だったのか？」とは思わなかった。マリアは
「神殿でイエスを見失った出来事」でも「十字架の下」でも「なぜ？」と尋ねるより「心に留めた」

マリアは、してしまった間違いをくよくよ気に悩まず、沈黙の祈りのうちに出来事を受け止めます。

マリア様の離脱（自分のこだわりから離れて神様の思いを受け入れる：養成）

どんな母親にも、自分の息子をわがものにしたい所有欲があります。自分の理想を息子に投影しようとする誘惑があります。このような息子への思いからマリア様には離脱が求められます。

神様は、母としての望みを叶えたいマリア様を、神の計画が実現するように、神秘的で深遠な方法で養成されました。

イエス様の思い

イエスは「どうして私を探したのか？」 イエスのニュアンスは、私を探すことは神を探すことでした。

マグダラのマリアのように遺体を探すのではなく、真理・生き方を探すこと。

「三日の後、イエスが・・・おられるのを見つけた。」 マリアとヨセフはイエスの身体は見つかりましたが、イエスの心の向かう先は分かっていません。

会話は噛み合いません。深い神秘です。

神殿での失踪事件の中心は、イエスと神殿の密接な関係がはっきりしたこと。神殿は、御父がおられる場所とわかったこと。「ナザレの蓄積」の大きな出来事。

元の生活へ

そのまましばらく過ごさなければならなかった。(ルカ 2:51～52 ナザレに帰って両親と暮らす)

まとめ

- ・イエスの幼年期、マリア・ヨセフと暮らしながら「ナザレでの蓄積」が進む。
- ・神殿での失踪事件は、イエスの心が御父に向いたことがはっきりわかる出来事。

・マリアは、理解できない出来事を「心に留め」、神様は、マリアを養成されます。

・神様の計画と揺れ動く両親の思いの深い部分は私たちにはわからない神秘。

余談 カトリック新聞 2021 年 10 月 24 日号の記事を送る

母からのメール「届きました！ 相変わらずカブトムシですね。」 入会の反対から 20 年経った

振り返りの質問

Q. 貧しい人にイエス様が共感を持てるのは環境が起因するものがあったでしょう。あなたはどのような環境に生きてきたでしょうか？ 貧しい方、弱い立場の方との関わりがあるのでしょうか？

Q. 「信仰の模範のマリア様も養成される必要があった」とマルティニ枢機卿は書かれています。マリア様の養成（離脱）の出来事 1～3 を振り返りましょう。どのような葛藤があったのでしょうか？

Q. あなたは信仰生活でどのような葛藤を抱えてきたのでしょうか？ 神様に従ってきたのでしょうか？

「ナザレの蓄積」「養成されるマリア様」を知った後#53の3つの質問に答えてみましょう。

Q「キリストのために何をして来たのか?」

「何をしようとしているのか?」

「何をすべきなのか?」

終わりの祈り ロザリオ 喜び 第5の奥義

参考文献

『祈りの友』発行 カルメル修道会 サンパウロ 1980 年

『イエス・キリストの履歴』岩島忠彦著 オリエンス宗教研究所 2011 年

『キリスト教とは何か』ペトロ・ネメシュギ著 女子パウロ会 1977 年

『あなたがたは祈るとき』 マルロ・マリア・マルティーニ著 吉向キエ・池田敏雄 共訳 中央出版社 1983 年

『人びととともに歩むマリア』 カルロ・マリア・マルティーニ著 吉向キエ訳 女子パウロ会 1993 年

『宣教者を育てるイエス』カルロ・マリア・マルティーニ著 今道瑤子訳 女子パウロ会 1988 年

『靈操』 聖イグナチオ・デ・ロヨラ著 ホセ・ミゲル・バラ訳 新世社 1986 年